

加工用米品種の高密度育苗による省力低コスト化

高密度育苗→育苗箱数・資材費・運搬、苗継ぎ時間を減らせる新技術

背景・目的

- 水田農業の持続的発展のため、規模拡大や需要に応じた多様な米づくりが必要です。
- 本県の主要産業である焼酎醸造業からは、国産米、地元産米の生産拡大が強く求められています。
- 焼酎麴用米は主食用米に比べ価格が低いため、安定多収省力低コスト技術確立が重要です。
- 直播は有効な技術ですが、スクミリンゴガイの被害や倒伏が懸念され、新たな技術が望まれています。

成果の内容

- 播種量を250g/箱とする高密度育苗と対応移植機の利用により、減収することなく、使用する育苗箱数を3割～5割削減できます。
- 普通期栽培では育苗期間を1週間程度短縮できます。

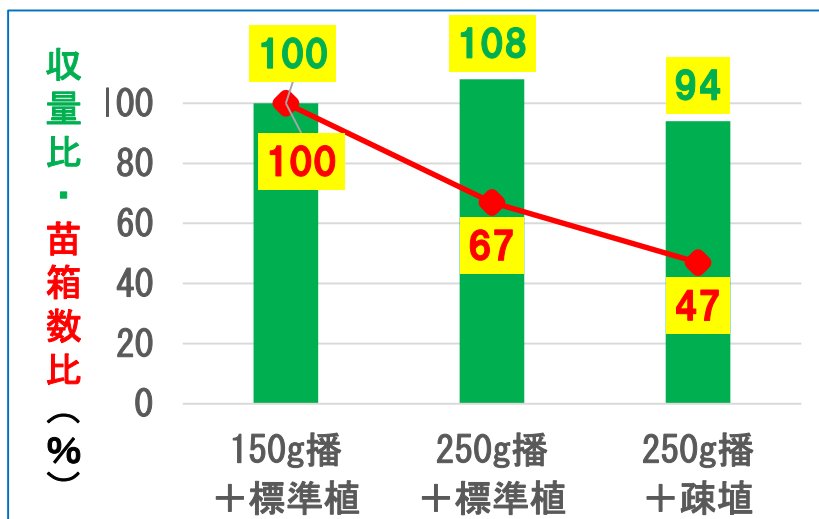


図 「み系358」における慣行播種量(乾籾150g/箱)の標準栽植密度に対する高密度育苗(乾籾250g/箱)の使用育苗箱数比、収量比



図 播種後の様子
(左：乾籾150g/箱、右：250g)



図 高密度育苗対応移植機

成果の活用方法(又は期待される効果)

- 10ha 規模の経営では、苗に関する経費を40～70万円削減できます。
- 使用する育苗箱数の削減により、軽労化も期待され、集落営農法人や大規模経営体での導入が見込まれます。
- 普及対象地域・面積
早期栽培60ha、普通期栽培140haを目標とします。



図 増設用播種ホッパー(左)とホッパーを設置した播種機(右)

留意点

- 高密度育苗対応移植機の価格は、同社慣行移植機に比べ約5万円高くなります。
- 極端な疎植では収量が低下するので、注意が必要です。